

「共通フレーム2007」の役割と活用法

開発テーマの多様化、開発体制の国際化、ガバナンスや信頼性向上への要求など、今日のシステム開発はさまざまな課題を抱えている。そのなかで品質の高いシステム開発のより所となるのが、作業項目を網羅的に定義した共通フレームである。本稿では、共通フレームが果たす役割、その活用のポイントについて考察する。

共通フレームの役割

共通フレームは、システムの発注側（ユーザー企業）と受注側（ベンダー）の「共通の物差し」となるよう、システムの企画から開発・運用・廃棄に至るまでの作業について、その適用主体者、範囲、内容を網羅的に規定したものである。1994年3月の発行から1998年の改訂を経て、2007年10月に再度改訂され「共通フレーム2007」として発行された。

共通フレームはソフトウェアライフサイクルプロセスの国際規格であるISO/IEC 12207をベースにし、これに日本独自の拡張を行ったものである。企画、要件定義、開発、保守、運用といった、いわばソフトウェア開発のメインプロセスに加え、取引やマネジメントを含めたプロセスまでを幅広くカバーしている（図1参照）。

共通フレームでは、すべての作業をプロセス、アクティビティ、タスク、リストという4つの階層で規定している。たとえば、企画プロセスの下に「システム化構想の立案」というアクティビティがあり、その下に「業務の新全体像の作成」というタスクがある。さらにタスクの下には、そのタスクに関する代

表的な作業がリストとして示されている。

注意が必要なのは、それぞれのプロセスやアクティビティの順序は定義されていないことである。共通フレームを利用する際には、利用者が自社のシステム開発に適した開発モデルに沿って、各プロセスやアクティビティを作業工程として定義することが必要になる。

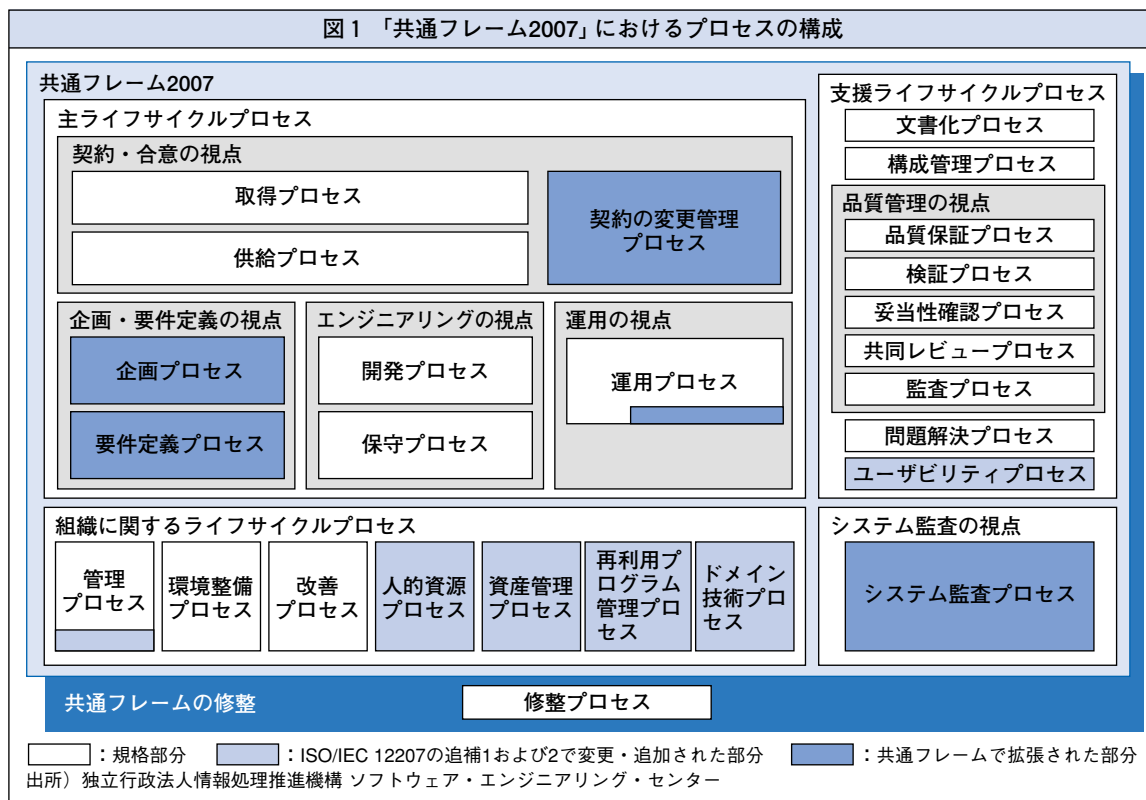
共通フレームの効果的な活用法

共通フレームは企業内の標準プロセスを定義する際のより所になる。しかし、すでにプロセスが定義され利用されているのであれば、それを共通フレームに照らして一から見直すのは現実的ではない。そこで、すぐに実行可能な共通フレームの活用法をあげてみよう。

第一に、業務改革プロジェクトのような業務部門に関係するプロジェクトにおいて、「作業項目のチェックリスト」として活用することである。とくに今回の改訂では、業務部門の作業・役割の明確化に重点のひとつが置かれている。そのため、企画プロセスの作業を効率よく網羅的に実施するためのガイドラインとなるばかりでなく、運用プロセスで業務部門が実施すべきタスクが列挙されており、プロジェクト計画で業務部門の役割に漏れが



図1 「共通フレーム2007」におけるプロセスの構成



ないか確認できるようになっている。

第二に、RFP（提案依頼書）の作成時などに、ベンダーの作業を定義するためのモデルとして活用することである。ベンダーに対して共通フレームに基づいて工程・役割を定義するよう求めることで、ベンダーとの取引範囲・役割分担の明確化が可能になるであろう。

第三に、プロセス改善のためのモデルとして利用することである。社内に開発標準プロセスがある場合は、共通フレームとの比較・照合を行うことにより、自社プロセスの網羅性や粒度の確認ができる。その結果に基づいて自社プロセスの分割や追加・変更を行うこ

とで、より網羅性の高いプロセスに改善することができるだろう。

開発力強化の基盤として

システム開発力の強化には、適切なITガバナンスのもとで開発プロセスをコントロールし、かつ各プロセスに応じた適切な技術や手法を用いることが必要である。それは、開発プロセスはガバナンスや技術の基盤となるということでもある。その開発プロセスに関する標準規格である共通フレームが広く普及することにより日本のシステム開発産業の競争力が高まることを期待したい。